

<帰国報告書> グリフィス大学での交換留学を終えて

記 入 日：平成24年3月1日

所 属：教育文化学部国際言語文化課程 国際コミュニケーション選修
4年次 佐々木 麻実 1507333

派遣先大学：グリフィス大学（オーストラリア）

派遣身分：交換留学生

派遣期間 2011年2月15日～2012年1月16日

1. グリフィス大学での学習内容及び今後の勉学計画

私は自分の趣味である旅行や観光業に携わる職業に就きたいと考えていたので秋田大学で履修していた科目とは全く違う分野の観光学を中心にイベントマネジメントやホテルマネジメントの授業を受講しました。観光と環境、経済と社会のつながりを含め”持続可能な TOURISM”を学び個人ではネパールの観光について研究しました。

イベントマネジメントの授業ではウェディングイベントを計画し、ホテルマネジメントではホテル経営の基礎の他にホテルのフロントで使われているコンピュータシステムの使用方法を習得しました。キャンパスのあるゴールドコーストは世界的に人気のリゾート地でもあり、グリフィス大学が観光の分野に力を入れているのもあってそれらのコースには様々な国から学生が集まっていました。大学では英語が第二言語であるということは一切考慮されませんし、授業の中でも常に自分の意見や考えを発言することを求められました。英語は使えて当たり前、黙っているのは授業に参加していないと同じこと。最初は講義のスピードについていき内容を理解するだけでも精一杯で自分から発言するには抵抗がありましたが、他の国からの留学生たちが間違いを恐れなくて堂々と意見を発信し、そこからどんどんディスカッションを展開していくのを見て私も常に”参加する”ということ意識して授業に臨むようになりました。

授業は中間や期末テストのほかにレポート提出やパワーポイントを使ってのプレゼンテーションの課題があり、グループやペアで協力して作り上げるものが多いため授業時間外も学校に集まって時には深夜まで課題に取り組みました。どのプレゼンテーションでも共通していたのが“退屈”を避けること。ワインツーリズムの授業ではワイナリーの紹介をするときにチーズとワインを実際に用意して試食しながらプレゼンテーションを行いました。どうせやるなら思いっきり楽しい時間になるようにと個々のグループがそれぞれこっそり工夫を凝らします。日本の学生とは違って、どんなに難しく大変でも楽しむことを忘れないで勉強している友達に刺激を受けました。もちろん自分とは全く違う環境で育ち、文化や考え方も全く違う人たちと一つのことを成し遂げるのは決して単純ではありませんが自分では思いもよらないユニークなアイデアが出てきて感心したり、相手の意見の主張の仕方に少し戸惑ったり、時間に対しての考え方

の違いに国民性の違いを感じたりとグループ活動の中でたくさんの異文化体験をすることができたと思います。

また2学期終了後に現地の旅行会社で3か月間のインターンシップをしました。世界自然遺産に登録されているスプリングブルック国立公園にて催行されている土ボタル鑑賞ツアーに参加し、エコツアーガイドとして土ボタルの生態や多雨林地域特有の植物と昆虫、環境保護への取り組み、オーストラリアの地形やアボリジニの文化の紹介をしました。大学で得た知識も生かして観光の現場で実践経験を積むことで留学生活を締めくくることができました。



卒業研究では秋田大学で勉強していた民俗学とオーストラリアで学んだ観光学を交え、オーストラリアの先住民アボリジニの文化と言語保存についてアボリジニがオーストラリアの観光に与えている影響力と合わせて研究したいと思っています。

2. オーストラリアでの生活面について

前期は大学に隣接されている学生寮にカナダ人、アメリカ人、オーストラリア人のルームメイトと一緒に住みました。オーストラリアに渡航前にフィジーやニュージーランドでの短期語学留学を経験していたので多少は英語に自信があったつもりでしたがそれぞれ違うアクセントで速く話す彼女たちの会話についていけず、いきなり不安に苛まれたのを覚えています。しかし一緒に食事をしたり映画を見たり買い物に行ったり、毎日共に生活していくにつれてだんだん言葉の壁も感じないようになっていきました。寮では数え切れないほどたくさんのイベントが催されていて曜日ごとにタコスやホットドックなどの食事がふるまわれ、その他にも映画鑑賞会や運動会、また季節のイベントが盛大に行われるので退屈している暇はなく友達を作るのに時間はかかりませんでした。特にわたしはクッキングクラスに毎週参加していて、講師として巻き寿司の作り方を教えたこともありました。また日本では考えられませんがナイトクラブへのバスが毎週寮からでていて割引特典もあり、テストが終わった後はほとんどの学生がバスに乗って出かけていきました。



オーストラリア人は陽気で社交的、いい意味でも悪い意味でも適当です。じりじりと照りつける太陽の下、時間や規則に縛られすぎることなくリラックスして生活しています。“HAPPYでいること”が必要不可欠であり、自分が幸せを感じる時間をうまく作って一日を楽しくしようとします。それから大のおしゃべり好き。初対面の相手であっても「Good day, mate!」ととってもフレンドリーに話しかけ、そして話し出すと止まりません。道路工事もおしゃべりばかりしているのでなかなか工事が進んでいる気配はありませんし、バスのドライバーだって運転しながら私に話しかけてくるのです。

ゴールドコーストはオーストラリアの東海岸に面しているので約40kmのビーチが続いています。地元の人でもビーチが大好きでいつでもビーチにはたくさんの方が集まります。マリンスポーツが大好きな私は休日にスキューバダイビング、サーフィンやボディボードを思う存分楽しみました。特にサーフィンは国民のスポーツ。住所が”サーファーズパラダイス”というだけあってサーフィンをして朝食を食べてから会社や学校に行くのが地元の人々の生活スタイルです。私も朝は苦手ですが大好きなサーフィンのためには一緒に早起きして友達と波乗りを楽しみました。週末はほとんどビーチで一日過ごし、気付いたら肌がこんがり焼けあがっていました。

3. グリフィス大学での留学を終えての感想

留学を振り返ったとき一番に思い出すエピソードがあります。東日本大震災の後に企画したイベントのことです。留学生在活が始まって約一か月経ったところに東日本大震災が起きました。オーストラリアのニュースでは見るに堪えない映像だけが一日中何度も何度も流れ、具体的な状況がなかなかつかめずに日本にいる家族や友達が心配で眠れませんでした。たくさんの方が「家族は大丈夫か?」「日



本ならきっと大丈夫だから。」と声をかけてくれました。数日後にはわたし宛にたくさんのお米やおむつ、缶詰の食料、粉ミルクやトイレットペーパーなどが届き始めました。ニュースでそれらの物資が不足していると聞

いて数人の寮生が持ってきてくれたそうです。

それを見てわたしもじっとしてはいられなくなり、大学の友達と協力して募金を集めるイベントを計画することになりました。始めは募金してくれた人にお煎餅をあげるといった程度のもをを考えていましたが協力してくれる人が集まるうちにイベントはJETRA (Japanese earthquake and Tsunami Relief Appeal) と名付けられ、大学内のレストラン、地域のパーマーケットや遊園地、スポーツドリンク会社など、本当にたくさんのスポンサーや協力者がついた大がかりなものとなりました。寿司、お茶教室、書道教室、折り紙、相撲大会、ステッカー、Tシャツ販売などに加え、プロサーファーがサイン付のサーフボードをオークションにかけて売り上げを寄付すると名乗り出たり、現地で大人気の料理番組のシェフが大学へきて料理パフォーマンスをすることになったりと話題性が増し、更にいろいろな人の知恵と協力が集まって当日は本当に大きな成果を上げました。真っ白だった大きなメッセージシートもいろいろな言語の日本を励ます言葉で埋まり、集まった全ての募金や物資と共にオーストラリアの赤十字を通して日本に正式に届けられました。

心細かったときに声をかけてくれた友達や一緒にイベントを運営した仲間、協力してくれた人々のおかげで私は辛い時期を乗り越えられたし、この経験や出会いがその後の留學生活の大きな心の支えになりました。またこのイベントを通して日本が世界からどれだけ評価され好かれているかに気付くことができ、自分が日本人であることを誇りに思いました。一人ぼっちで渡豪したのに今ではたくさんの友達やオーストラリアの家族と呼べる人々に出会い、「早くオーストラリアに戻ってきて」と待っていてくれる友達は私の宝物です。たくさんの人に支えられて笑顔で過ごしたオーストラリアでの留學生活を私は忘れません。最後にこの留學生活を応援していただいた大学の先生やスタッフの皆さん、また旅費等の補助をいただけたことに感謝いたします。

